

氏 名	姜 宇 英
学 位 の 種 類	博 士 (美 術)
学 位 記 番 号	博 美 第 357 号
学位授与年月日	平 成 24 年 3 月 26 日
学位論文等題目	〈論文〉地域系アートプロジェクトとアーティスト-外なるアーティスト 〈作品〉unspoken words
論文等審査委員	
(主査)	東京芸術大学 教 授 (美術学部) た ほ り つ こ
(論文第 1 副査)	〃 准教授 (音楽学部) 熊 倉 純 子
(作品第 1 副査)	〃 教 授 (美術学部) 日比野 克 彦
(副査)	〃 〃 (〃) 高 山 登

(論文内容の要旨)

本論は、韓国の「地域系アートプロジェクト」と、地域系アートプロジェクトの中で見られる「外なるアーティスト」を研究するものである。本論においては、自身の内の世界から外（他者や社会）に目を向け、現実を反映・喚起する社会参加型活動を行っているアーティストを「外なるアーティスト」と命名する。その活動の社会的・芸術的意義を検証することで、これまでの韓国「現場美術」の研究史における地域系アートプロジェクト研究の欠落を埋めると共に、地域系アートプロジェクトの今後のさらなる研究と評価の土台を提供することを目指している。

1980年代の終わりから1990年代初頭までの韓国美術界は、既存の美術が持つ保守性に対する反発意識が高まり、ポストモダニズムについての論争が活発であった。同時に、当時の政治社会の現実直面して発言する「民衆美術」が熱を帯びていた時代でもあった。このような変化と論争の80年代を経て、90年代の韓国アートシーンでは多様性、表現の自由（ジャンル拡張と脱ジャンル）、脱ホワイトキューブ、アートの社会参加などについて論議が活発に行なわれた。アートプロジェクトはそうした中で、現場性（脱ホワイトキューブ）、社会的発言（アートの社会参加）に興味を表すと共に、「民衆美術」の現実認識を基盤とした自発的・地域的文脈を受け継いで展開された。時代的状況と、「民衆美術」を目撃・経験したアーティストらという背景から、多数のアーティストが1つの特定地域に集まり、現場性と社会的発言と課題の遂行が重視される大規模プロジェクトを行なうという試みは、地域社会の問題に注目するテーマに帰結し、積極的に地域社会に参加する社会運動的性格が強い韓国型地域系アートプロジェクトの成立という結果として現れた。

1章では、このような韓国型地域系アートプロジェクトの美術史的・時代社会的背景から現状までを考察し、「現場美術」の地平の中で地域系アートプロジェクトの位置と境界を定め、地域系アートプロジェクトの概念整理作業を行った。韓国の地域系アートプロジェクトは積極的な現実認識・社会参加・芸術の公共性と社会文化的効用性を論じるという点で、「公共美術（パブリックアート）」や「地域美術運動」などの「現場美術」と苦慮を共有しながら成長し進化してきている。しかし自身の現場での観察や参加に基づいて研究した結果、地域系アートプロジェクトはアーティスト主導型で、若手アーティストに活動の場と外なる地点を提供し、情緒的響きをもたらす社会的発言として新しく多様な作品や活動を紹介する、といった特徴と成果をあげていることが分かった。

2章と3章では、実例をあげて地域系アートプロジェクトと参加アーティストの活動及び作品について詳しく論じた。

2章の「炭鉱村美術館」は、2000年に廃坑村の江原道旌善郡古汗邑で行われた活動であり、韓国地域系アートプロジェクト史では比較的初期に行われた大規模プロジェクトと言える。古汗邑は韓国近代産業史の上で重要な場所だが、その機能を果たした後に遺棄されていた中、政府によりカジノ関連観光娯楽施設地として再開発する政策が発表され、各界で再開発事業の内容の妥当性についての議論を呼び起こした。そのような状況の中、若手アーティスト達が廃坑村に入り大規模な美術祭を開催し、地域社会の現状報告・記録・再開発政策への社会的関心の喚起などをテーマにする作品と活動を通じて、社会的・政治的アジェンダに関わりながら、アートの社会的発言力・場の見直し（美術の現場の拡張）・表現の拡張などを試みた。「炭鉱村美術館」の活動は「民衆美術」以降の社会政治参加型アートの新たな試みになったと共に、本人をはじめとする若手アーティストらに地域系アートプロジェクトに目を向けさせるきっかけとなったと考えられる。

3章では、韓国の地域系アートプロジェクトの代表的な例と評価されている、京畿道安養市石水市場で行われている「Seoksu Art Project」（略称、SAP）について述べた。空き店舗が並ぶ昔からの市場の中に、社会参加型アート活動を目指すアーティスト達が集まり、数年間継続して新たな文化の種を巻きながら、地域社会の議論に積極的に発言している。こうした彼らの活動を通じて、公共的・社会的メッセージを発信するアートの社会文化的な効用性と可能性、現場性と地域性について考察した。その結果、実際に社会に対して政治的な影響力を持ち、現状を再考させると同時に、アートと社会の関係性を再構築していることが分かった。と同時に、アーティストに外（他者や社会）に向かう眼差しについて考えさせる機会や場となっていることが分かった。また、「Seoksu Art Project」の中で出現する新しい作品型の考察からは、地域系アートプロジェクトが表現と美術現場を拡張する地点となっていることを再確認した。

終章では、2章と3章の考察を踏まえ、地域系アートプロジェクト・外^{そと}なるアーティスト・外（他者や社会）の関係を再び考察し、地域系アートプロジェクトの成果、記録の不足や審美的価値の再考などの課題、今後の展望について述べた。

以上の研究を通じて、地域社会に基づいて、公共のコミュニケーションを図る表現活動を行っているアーティスト達の意思の集団的表れである地域系アートプロジェクトが、地域社会の議論に関わりながら場（地域）の新たな文化創成と個の社会化を実践し、アートの社会的意義を拡張する「外^{そと}なるアーティスト」が生まれ成長してゆく場であることを確認した。そして、プロジェクトの中で見られるアーティストの活動及び作品が、他者の尊重という基底から生まれ、他者と社会の現実を反映・喚起しながら、現状の記憶と記録・見直し・改善のために、常に新しく変わりつつある表現として現れ、人々の間で情緒的・機能的に作用していることが分かった。今後も地域系アートプロジェクトが、多くのアーティストに多様な外^{そと}なる表現の場を提供すると共に、社会と人との不可欠な関係を補充する活動として成長していくことを期待し、研究者として、またアーティストとしてその過程を確と見据えていきたいと思う。

（博士論文審査結果の要旨）

本論文は、日本において昨今各地で盛んに行われている「アートプロジェクト」と呼ばれる形態の芸術活動に触発されて、韓国における類似の動向を理論的に韓国現代美術史の中に位置づけようとする意欲的な試みである。日本においても現状が先行し理論化が追いついていない状況のなか、韓国における「アートプロジェクト」を歴史的見地から理論化する試みは、今後、日韓の美術状況の比較のみならず、日本における「アートプロジェクト」の理論化においても、大きな指標となるものとして高く評価したい。

本論の特に評価される点は、以下の2点である。

1) 民衆美術運動以後の社会参画的芸術運動の契機としての位置づけ

韓国の現代美術史において重要な契機となった反体制的活動である民衆美術運動の次の世代である筆者は、民主化が実現した韓国社会において若い芸術家が集団で社会参画を試みる機会として「アートプロジェクト」を位置づけている。韓国の美術界には「パブリックアート」と「コミュニティアート」という概念区分しか存在していないことに着目し、第三の傾向として「アートプロジェクト」の特徴や発生の経緯を詳述し、一定の説得力を有する論述に達している。

2) 実践経験に基づく活動記録

初期の活動である炭鉾村美術展への参加、長期にわたる安養市でのプロジェクトへの参与観察を背景に、芸術家たちの表現に地域社会の多様な文脈がどのように影響を与えたか、プロセスに身を置いたものにしか看取しえない知見が多く盛り込まれ、歴史的に貴重な論考になっている。

本論において韓国におけるアートプロジェクトの特徴的諸相の抽出に成功した筆者には、今後も日韓比較など更なる研究の展開を期待したい。

(作品審査結果の要旨)

薄暗い展示室の中に、10枚のハンガーに掛けられた白いシャツが美術館の天井から、空間に散りばまうように吊られてある。数枚のシャツが、ゆらゆらとわずかな空調の風で揺れている。白いシャツに映像が投影される。シャツが白いスクリーンになり、身体に纏われていないシャツは、その実態なき抜け殻の心境を語るかのように投射される映像を受け入れている。しかし、いくつかのシャツはその映像を拒絶するかのごとく、ひらりと体をかわし、その光を後方へ流す。流された光は、再びシャツに映写される。映像はしばしそこでシャツの主であろう身体の心境を語る。

赤い炎がシャツに映っている。始まりは大きな炎がだんだんと弱くなり、直に火種のような僅かな赤い点になり、やがて消える。これが繰り返し白いシャツに映写される。

作品の制作にあたり、実態としての白いシャツ、映像としての赤い炎という、簡潔な二つのアイテムだけを使い、人間の命、心、時という概念を想起させるインスタレーションであった。しかし空間の暗さがもうすこし暗いほうがより、映像により浮かび上がるシャツが効果的に見えたのではないかと感じられた。また、映像の始まりと終わりの部分がカットされているのがわからない見え方にしたほうが、時間がつながっていく連続性が感じられたのではないかと感じられた。

論文に関しては日韓のアートプロジェクトについての比較が調査に基づき細くなくされており、大変興味深いものであった。今後の二つの国が互いに成長し合っていくうえで重要なものとなっていくであろう。今後は日韓をつなぐアートプロジェクトのキュレーション、プロデューサーなどの活動なども実践し、より見識を深め、次なる時代のアート界を作っていくっていただきたい。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、韓国からの留学生として本学の大学院で学び、取手アートプロジェクトをはじめとする「アートプロジェクト」への参加や運営に関与した体験から大きな影響をうけ、日韓で「アートプロジェクト」の実践と研究を継続としてきた申請者の集大成である。

日本各地で盛んに行われている「アートプロジェクト」であるが、韓国においても類似の動向を認め、本論文においては、それらを理論的に韓国現代美術史の中に位置づけようとする意欲的な試みとなっている。欧米における実践研究が主流となっている韓国の美術界において、「パブリックアート」と「コミュニティアート」の概念のみが存在することに着目し、第三の傾向である「アートプロジェクト」の特

徴や発生の経緯を詳述しながら未踏の領域に踏み込み、説得力のある論述となった。特に1) 民衆美術運動以後の社会参加的芸術運動の契機として位置づけたこと、2) 実践経験に基づく活動記録にはプロセスに身をおいた者にしか看取しえない知見が多く盛り込まれており、歴史的に貴重な論考となっている2点において非常に高く評価された。

審査作品は、薄暗い空間に人々の抜け殻のような白いシャツが何枚も重なるように宙づりとなっており、火炎の映像が投影されるインスタレーションであり、何かが内面で燃え始める心境を語るように見え、また表現への意志の存在を感じさせるような具体的でありながら、語られない何かを喚起させるものであった。現場の状況に大きく左右される映像をもちいたインスタレーションの難しさが見られたが、充分な作品であるとの評価を得て、日韓をつなぐ「アートプロジェクト」をキューレーションやプロデューサーなど、今後の活躍に期待がよせられた

以上のとおり、本論文・作品ともに博士課程に相応しい優秀な成果と認め、総合的に判断し、全員一致で合格とした。